●古賀敦子&川島余理

古賀敦子はパリやケルンで研鑽を重ねたフルート奏者。バルセロナやパリのコンクールで上位入賞をはたし、現在はドイツのホッファー交響楽団ソロ・フルーティストをつとめている。一方ピアノの川島余理はブーローニュやパリで学び、パリ国立高等音楽院で伴奏員をつとめるなど、パリを中心に活動している人。この日はベートーヴェン、ライネッケ、ショパン、鈴木理香、ドビュッシー、ヴィドールの作品を演奏した。2人とも、なかなかの才能を持った人達だと思った。しかし、持てる力は、この日、デュオ曲では発揮出来ていないと思えた。それは多分、2人の音楽的感性が鋭く磨かれていて、その尖鋭な神経の先端が合致し切れていなかったのだろうと思う。この域を越えて、幅が広がっていけば、2人の応答は、もっと臨機応変となっていくような気がした。その中で鈴木理香のフルート独奏曲「風の通」は演奏者の集中力も強く、繊細でありつつ薄弱ではなく、エネルギーが満ちてもおり、古賀の力は十分発揮され、聴き応えあった。またライネッケのフルート・ソナタの第一楽章やヴィドールのフルートとピアノのための「組曲」第一楽章における川島の表現も魅力的であった（9月10日・津田ホール）。